

2) コウゾ=楮

コウゾはクワ科の落葉低木で本州以西の山地に自生し、沖縄や、朝鮮、中国にも分布する。昔から紙の原料をとるために栽培もされてきたが、高さは 5m ほどになり、葉は不規則に 2~5 裂した卵形で互生し、先がとがり縁には鋸歯がある。前種の梶と異なり本種は雌雄同株で、5 月頃雌花は上部の葉腋に球状に集まった、赤い小花を下垂してつけ、雄花は黄褐色で若枝の基部の葉腋につける。紅熟した果実はキイチゴにも似て、初夏には赤塾し、甘味があるために食用にされる。和名の由来はカミソ(紙麻)がつまったものとする説や、「穀桑」の音便である [ku so] が変化したとする説、あるいは「穀楮」の音 [ku so] から生まれたとする説、神に献ずる衣の材料にしたところから「神衣」(カミソ)が転じたとする説などがある。別称としてはカミギ、カゾ、カズ、コゾノキ、コージノキ、ヤマガミなどさまざまである。学名は『*Broussonetia kazinoki*』で、種小辞は前種のカジノキと勘違いをしたためである。この木のことを朝鮮では [tak] (栲)、中国では『楮』と呼んでいる。

楮が初めて文献に現れるのは『日本書紀』で、610 年高麗の僧、曇徴(ドンチョウ)が製紙技術を日本に伝えた時のこととされ、この頃に栽培種の楮が渡来したと思われる。またコウゾはカジノキと山野に自生するヒメコウゾの雑種と考えられており、ともに繊維質を取り出して和紙の原料にするほか、古代にはこれらの繊維で布を作ったために、古くはユウ(木綿)とも呼ばれ、これは木から取れる綿という意味であった。製紙の始まる以前には衣料用とされ、幣(ヌサ 01-04-08-1 コブシの項参照)を作る材料にもされたのである。また大和の香具山は本来、楮の栽培地で、楮の方言である「カゴ」が転訛して香具山になったともいわれている。他方 1275 年に成立した『名語記』(ミョウゴキ)には「此たくは紙すくかうその皮をもちてをりなせりときこゆ」と記され、「栲」が木の名前ではなく、『布地そのもの』であったと解釈され、前述の「栲」と「梶」あるいは「栲」と「楮」との関係を知ることができる。また 1793 年成立の『新類題発句集』には、「楮さく花のゆかりや 国栖の里」とあり、国栖紙との関係も見えてくるのである。

コウゾから紙を作るのは 2m ほどに伸びた枝を冬のさなかに刈り取って、東ねて蒸気で蒸し、柔らかくして皮を剥ぐ。これを乾燥させたものを『黒皮』と呼び、黒皮から古い繊維層や表皮を取り除いて『白皮』を作り、これを和紙の原料にする。楮の繊維は紙を作る植物の中では最も長く、強靱であるために重宝され、障子紙や、表具用紙、傘紙などとして広く利用された。このため江戸時代には各藩の経済を支える大事な作物となり、茶、漆、桑、とともに四木として、盛んに商業栽培されたが、その後明治になると、海外からパルプが輸入されるようになり、製紙技術の進歩とともに次第に衰退していった。しかし現在では手作りブームの中、和紙で作った手工芸品はむしろ稀少品的価値があり、山里の土産物などとして注目されている。古くから和紙作りが盛んだった埼玉県の小川町では、紙漉きの里として町おこしを行っている。



構の木の葉、桑の葉にも良く似ている(東京都文京区小石川植物園)。



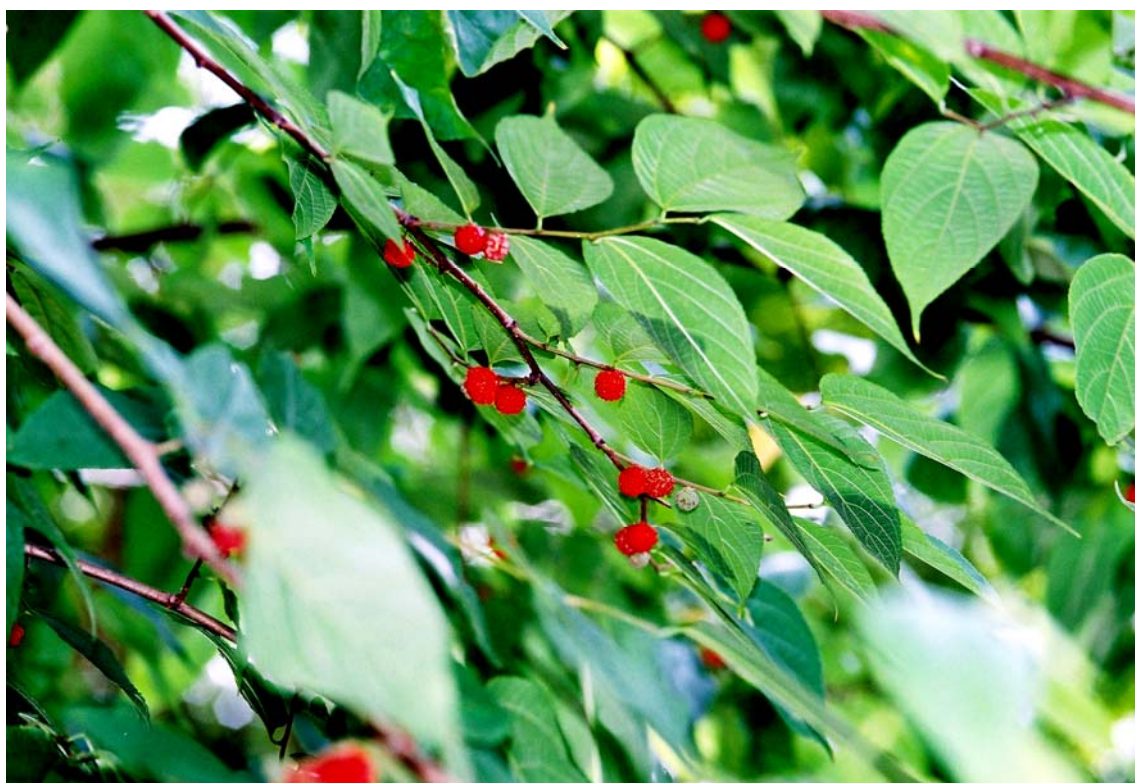
ヒメコウゾの大きな雄花、ところどころに小さい緑色の雌花が見える。ヒメコウゾの学名は『*Broussonetia kazinoki*』で、種小辞はカジの木の意味である(埼玉県所沢市)。



ヒメコウゾの若い果実(埼玉県所沢市)。



ヒメコウゾの熟した果実。甘味とわずかな酸味があっておいしい。桑の実と同じような味である。地元ではこの実を食べてはいけないと教えられてきたという(群馬県みなかみ町)。



ヒメコウゾの果実は、イチゴのようでおいしい(群馬県みなかみ町)。

[目次に戻る](#)